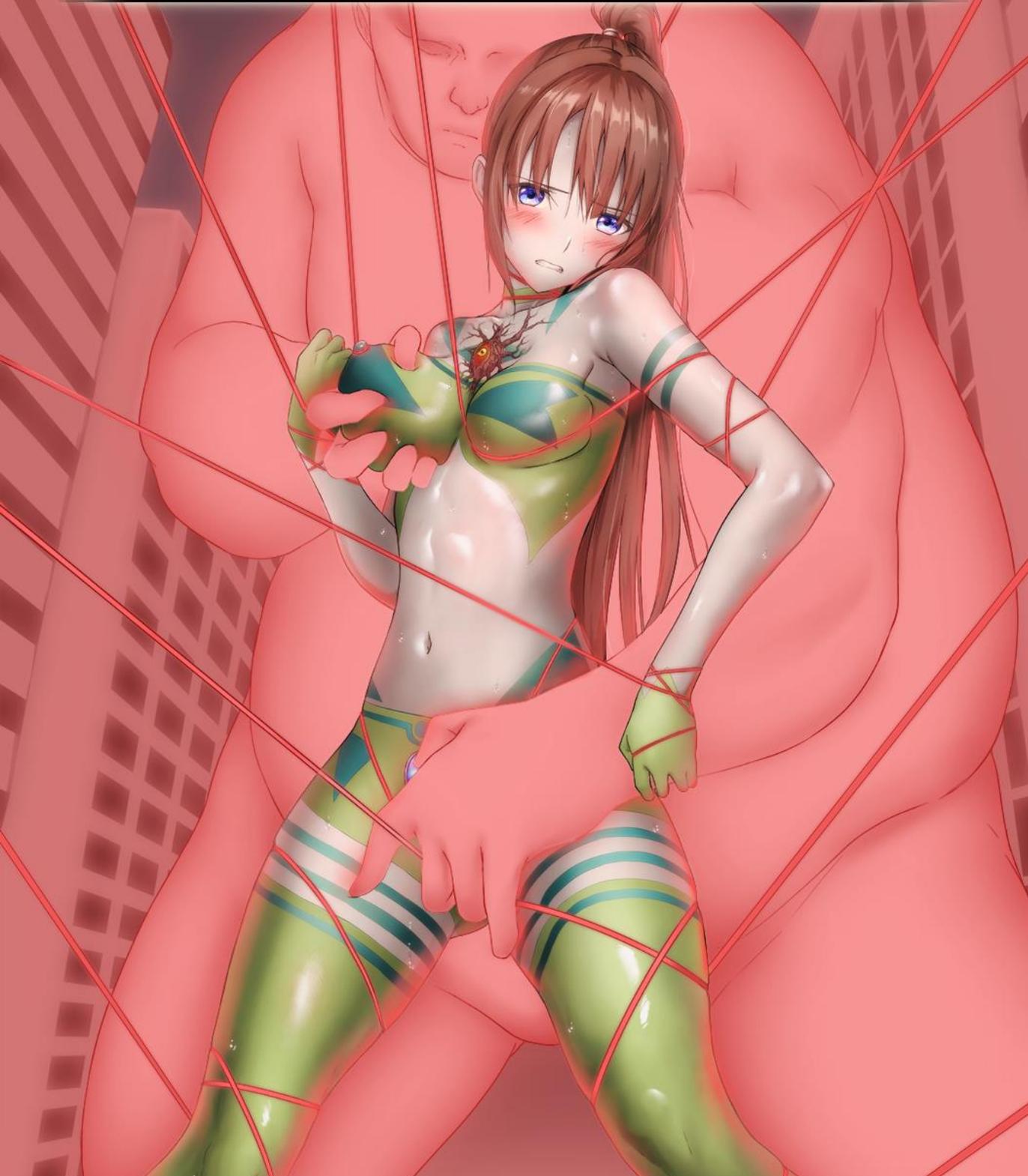


偶像
女神

タイムボフ

～アイドル公開処刑、奪われたホープステージ～



偶像女神ライムホープ
～アイドル公開処刑、奪われたホープステージ～

☆ステージプログラム☆

Opening: 希望の偶像

Stage1: 侵食されたホープステージ

Stage2: 破壊のワイヤーアクション

Stage3: 崩壊するサンクチュアリジュエル

Final: 墮淫女神のフィナーレ

小説: 北みなみ

挿絵: 地獄王子

(希望ヶ峰望/偶像女神ライムホープ 紹介インタビュー)

Q. まずは自己紹介をしてください。

A. はい、神木プロダクション所属、希望ヶ峰望（きぼうがみねのぞみ）です♪
現役JKやりながらアイドルとして活動しています。歌にダンスにバラエティ、ファッション雑誌のモデルなどなど、ジャンル問わずにお仕事させてもらってます!!

Q. 元気がいいですねえ。では、身体的なプロフィールをお願いします。

A. 身長165センチ、体重45キロ、スリーサイズはB83、W57、H82のCカップよ♪（事務所公式データ）

Q. ライムホープが使うホープステージについて教えてください

A. ホープステージはライムのエネルギーを使って生み出すキューブ状のエネルギーフィールドよ。外界と内部を隔絶して、一般市民や建物に被害を出さないようにしているの。これのおかげでアタシは街中でも思い切り戦えるのよ。それにステージ内では色んなギミックが使えて、戦いを有利に進められるわ。そうね、例えば

ワイヤー：身体に接続してアクロバティックな動きをする補助に使っているわ。使い方によっては武器にもなるし、重宝してるわね。

ホープフォッグ：入口用の煙で身体を包みこみ、出口用の煙に瞬間移動できる舞台装置ね。出口があらかじめバレちゃうのは難点だけど、ホープステージ内であればどこでも移動できるし便利よ。

ホープライト：ライムの能力をブーストする光を当ててくれるギミックね。色によって効果は様々でスピードアップやパワーブーストに使えるわ。ただ、ホープステージを張ってから1色につき1回しか使えないし、時間制限もあるから無駄遣いはできないわね。

ホープダンサーズ：エネルギー粒子を集めて人型のバックダンサーを生み出すギミックよ。ダンサーは最大2人まで呼び出せて、アタシがインカムマイクを使って指示を出して動かすわ。複雑な指示が出しづらいのとマイクが無いと動かせなくなっちゃうのが欠点ね。

Q. エナジーペイントについて教えてください。

A. ライムのエナジーで生み出した極薄のエネルギー膜のことよ。一層目をドレスエナジーペイント、二層目をランジェリーエナジーって呼んでるわ。運動能力の強化とか、防御力アップに役立っているわね。

ただ、エナジーが減少してくると段々と薄くなって、最後には消えちゃうわ。

Q. サンクチュアリジュエルについて教えてください。

A. ライムの下腹部にある宝石のことよ。ここを攻撃されると身体が火照ってきちゃって、え、エッチな感じになっちゃうの。エナジーペイントが薄くなると感じやすくなるから狙われないよう注意が必要ね。

Q. アンコールジュエルについて教えてください。

A. ライムの予備エネルギーが貯蔵されている宝石よ。胸の先端にひとつずつあって、万が一ホープクリスタルが空っぽになった時は自動でリカバリーしてくれる、最後の砦ね。

ジュエルは人体でいうところの乳首と同じ場所にあって、その、責められると感じちゃう弱点でもあるわ。

Q. ホープクリスタルについて教えてください。

A. 変身前は首飾りに碧色の宝石が埋まっている形をしているわ。変身後はライムの胸の上でエネルギー残量に応じて色が変わるわ。緑の内はまだいいけど、黄色になると、ドレスエナジーペイントが維持できなくなる。赤になっちゃったらランジェリーペイントもホープステージも壊れちゃって、正直、かなりピンチね。

ホープクリスタルがエネルギーに変換するのはアタシの想いと周りの人の願いよ。アイドルと同じでライムはたくさんのファンがいないと、本来の力を発揮できなくなっちゃうの。

Q. インタビューご協力ありがとうございます。最後にファンにむけて一言どうぞ。

A. エンシェントビーストとの戦いは決して楽なものじゃない。時にはピンチになって負けちゃいそうな時もあるわ。それでもアタシは最後まで諦めずに戦い続けるつもりよ。だから、みんなも応援よろしくね！

Opening: 希望の偶像

プロチームの本拠地にもなっている野球場から大気を揺るがすほどの歓声が上がっていた。3万5千人を収容できる客席は埋め尽くされ、球場の外ではチケットを買えなかった観客がせめて雰囲気だけでも味わいとひしめくほどの盛況ぶりだ。

ただし、この日球場を訪れた人々は野球の試合を見に来たわけではない。懸命に発せられる声援を受けているのは球場内に特設されたステージに立つたった1人の少女。

スピーカーから流れる大音量のBGMが会場の熱気を上げ、ステージ上の少女もマイク片手に観客を煽ってもっと盛り上げてくれとパフォーマンスしている。

凜と透き通った歌声に合わせた躍動感溢れるダンスは少女の若さと快活さをそのまま体現し、交差するスポットライトの煌めきによって天使が踊っているかのような錯覚を起こさせた。

観客を誘っていると思わせる艶めかしい指の動きは未成年の女の子とは思えないほどの色香を纏い、かと思えば年相応の小悪魔的な笑みを浮かべ、天使と小悪魔のギャップで見る者を更に惹きこんでいく。

そう、今日この場で行われているのは人気アイドルのライブだ。それも今をときめく超人気アイドル希望ヶ峰望（きぼうがみねのぞみ）のワンマンライブである。盛り上がらないわけがない。

切れ長の瞳が望の勝気な性格を宿してキラキラと光輝く。ツンと高い小ぶりの鼻と桜色に潤った柔らかな唇はプライドの高そうな気品に溢れており、彼女を美少女と呼ぶことに何の抵抗も持たせない神々しいオーラを付与していた。

背中につくほどの長い髪は1度も染めたことのない天然の茶髪。曲がクライマックスに入るのに合わせダンスが激しさを増していくと、汗で湿り気を帯びた長髪がライトの光を受けて煌めき、ファンを魅了して放さない。

フィニッシュと同時に右腕を天に向かって突き上げると、舞台に設置された装置からスモークが噴き出し、会場が一体となる歓声が湧き上がっていく。

「みんなアーーーっ！ 今日にはアタシのライブに来てくれて、本っっ当おーに、ありがとおおお！」

望がファンにむかって手を振れば、それだけで観客のボルテージが上がっていく。既にライブも終盤。途中休憩を挟みながらとはいえ、望は2時間近く歌って踊り続けている。

息がかなり上がってきており、遠目に見ても肩が大きく上下しているのがわかるほどだ。額に浮かぶ汗は頬を伝って流れ落ち、露出の激しい衣装から覗く肌も紅潮

して汗だくになっていた。

だというのに、天使のごとき美貌は疲れひとつ感じさせず、常に笑顔を絶やさずに煌めき続けていた。ファンみんなに心から楽しんで欲しい。言葉にするのは簡単でもここまでそれを実行できるのは望のアイドルとしてのプロ精神あってこそだ。

「こんなにたくさんのファンに囲まれてライブできるなんて、アタシ最っっ高おおに幸せだよ！ これも、みんなの応援のおかげだねえええーっ！」

聞いているだけで元気をもらえる声もまた、望がアイドルとして活躍できる天性だろうか。彼女の一言一句が会場を盛り上げ続ける。

そんな少女を彩るのは彼女の魅力を十二分に発揮するために用意されたステージ衣装だ。

望のイメージに合わせたショートパンツと臍出しタンクトップは白を基調とし、緑のラインが走るスポーティーなデザイン。身長 165 センチ、体重 45 キロと華奢な身体をしているが、痩せているという印象は少なく、どちらかといえば引き締まっていると形容できるボディラインが惜しげもなく晒されている。

細身でありながらも女性的な象徴であるバストは形良く膨らみ、Cカップを誇る胸がタンクトップの胸元から谷間を覗かせ、理想的なくびれを持つウエストもまた縦長のお臍が栄えていた。肉付きの薄いヒップは勝気な望の性格のようにキュッと上向き、健康的な桃型ラインを描いている。

右腕はアームカバーとブレスレット、左手は指抜きグローブによって包まれた長い腕がスラリと伸び、動作のひとつひとつがこれまた魅力的に映った。だが、それ以上に望のポイントとなるのは編み上げブーツを履く細くしなやかな足だ。

美脚アイドルとも呼ばれる望の足はまさに芸術品と呼べる造形。ショートパンツから伸びる太股は胸やお尻と比較すると、まだ脂のノリが薄く感じられる。しかし、日々のレッスンで鍛えられた筋肉を内包しており、健康的な少女の魅力を凝縮したようなハリを持っていた。

膝に向けて一旦細くなった脚線は脹脛から足首にかけてもう 1 度躍動感溢れる曲線を描き、キュッとしまることでメリハリを利かせている。ソックスの類がないおかげでファンは望の生足を拝むことができ、陶磁器のように繊細な柔肌がこれまた年頃の少女とは思えない色香を纏っていた。

「さーて、名残惜しいけど次がラストだよ！ それじゃ！ 最後はみんなの想いに負けない激熱なこの曲いってみよおおかあああ！」

望が指を鳴らすとライブを締めくくる曲が流れ出し、腕振りに合わせて会場中のペンライトが揺れた。

抜群の美貌と磨き抜かれたプロポーションに加え、高い歌唱力と身体能力を兼ね備えた理想の存在。まさにアイドルと呼ばれるために生まれてきた美少女は100パーセントのパフォーマンスを披露し、望のアイドル史に新たな1ページを刻むライブを成功させたのだった。

Stage1: 侵食されたホープステージ

「望ちゃん、お疲れ様。今日も最高のライブだったね！」

「ふふっ、と一ぜんでしょ！ アタシを誰だと思ってるのよ！ なーんて言っても、こんな広い会場で単独は初めてだったし、ちょっと張り切り過ぎちゃったところはあったけど。でも、アンコールまでバッチリこなして、流石アタシって感じ!!」

ライブを終え、控室に戻った望はドリンクを一口飲むと、横にしたVサインを右目の近くに寄せ満面の笑みを浮かべる。普段から人なつこい望だが、目の前にいる黒スーツの青年には特に親しく話しかけていた。

彼の名は相坂護（あいさかまもる）。人気アイドル希望ヶ峰望の担当マネージャーである。

「ねえねえ、相坂さん！ 今日はこのあと打ち上げあるんだよね？ なに食べられるんだらう、楽しみだなあ〜〜」

ドリンクを口に含み喉を潤すと、タオルでしきりに汗を拭く望。顔や首筋、腋や胸元と特に汗のたまりそうな場所を重点的に拭い、スタイリストがいるにも関わらず、自分で髪をいじって少しでも綺麗に見せようとしている。

いくら年頃の女の子とはいえ、ライブが終わった直後なのだから、そこまで汗や髪型を気にする必要はないだらう。だが、望にとってはファンに見られるのと同じくらい、いや、それ以上に可愛く見られたいと密かに思っていた。

（ちょ、ちょっと〜〜、相坂さん来るの早過ぎだよお！ まだ喉カラカラで変な声たまに出ちゃうし、汗臭いままなのに……もう！ 相坂さんってば!!）

新陳代謝の良い望はよく汗をかく少女だ。護はそんなことを気になどしていないが、望からすれば汗かきな体質は気になるところ。ましてそれが想いを寄せる異性の前であるならば尚の事だ。

そう、希望ヶ峰望と相坂護の関係はアイドルとマネージャーというだけではない。恋愛禁止のアイドルにはタブーとも言える恋人関係なのだ。

当然、2人の仲は公にはされておらず、バレれば望のアイドル生命も護のマネージャー職も終わる。その上、未成年の女の子と成人男性という年の差の壁まであった。

だが、好きになってしまったものは仕方がない。自分の気持ちにウソがつけない2人は禁断の関係を続けながら、今日もアイドルとマネージャーとして振る舞っていた。

（あれ？ 望ちゃん、足どうしたんだらう？）

そんな護だからこそ、望のちょっとした仕草にも違和感を覚えたのだらう。いつ

もと変わらない笑顔を浮かべつつ、やや前屈みになって右足を摩っている動作が目につく。

「ちょっと～～、相坂さんってばさっきからどこ見てるの？ いくらアタシの足が魅力的だからって、ちょ～～っと、見過ぎじゃないのお、エッチ～～」

「なっ!? 違う違う、誤解だよ！ その、足の摩ってるのが気になってさ。大丈夫？ 痛いのか？」

「えっ？ ああ、いや、これは別に痛いとかじゃなくて……ほ、ほら、最近ずっと仕事入ってたじゃん。それで……えっと、ちょっとだけ疲れてるってだけだから……あれ、もしかして、さっきのライブの時、アタシ足を庇ったりしてた？ おかしかった？」

護の指摘を受け、ファンに最高のパフォーマンスを披露できなかったのではないかと焦る望。もしかして、護のように心配させてしまったファンがいたのではないかと不安がよぎってしまう。

実際、ステージ上ではそんな素振りなど見せていないし、護でさえ今になってようやく気付いたほどだ。疲れなど微塵も感じさせてはいない。しかし、理想を求めストイックに打ち込む望からすれば不安を覚えるには十分な一言。

僅かとはいえ、彼女の笑顔を曇らせてしまったことを申し訳なく思い、すぐにステージが最高だったことを改めて伝え、太陽のように眩しい笑顔に戻った。

「もう一、心配させないでよね。まあ、よく考えてみればアタシに限ってそんなミスするなんてありえないし。どっちかっていけば相坂さんのミスかな」

「えっ、僕のせいなの!？」

「だってそうでしょ？ ハードスケジュールになっちゃったのはマネージャーの管理が原因だし、責任として相坂さんにマッサージでもしてもらおうかなあ～～」

小悪魔的な笑みを浮かべる望は口元に指を当てて護をチラリと流し見ると、編み上げブーツの紐を解いて脱ぎ、摩っていた右足が上になるよう足を組んだ。

いかにも、ほら、足をマッサージしてよ、と言わんばかりのポーズ。年上彼氏をからかう望は悪戯っぽく笑ってみせ、催促するように足先をクイクイと揺らしてみせた。

もっとも、望は本当にマッサージして欲しいわけではない。こうやって護をからかうのが彼女なりの愛情表現であり、恋人だけに見せる甘えた姿なのだ。

「……うん、わかったマッサージさせてもらうよ！」

「へっ？ いや、ウソ、本気で言ってるの？」

「当然だろ。望ちゃんの負担を少しでも減らすのが僕の仕事なんだから。じゃあ、始めるね」

「……う、うん……じゃ、じゃあ……お願い、しようかな……」

誠実かつ真面目な護は心の底から望のことを心配している。それがわかってしま
うからこそ、冗談だと誤魔化すことができず、引っ込みがつかなくなった望はマッ
サージを受けるしかなくなってしまった。

護が気遣ってくれていることは嬉しいのだが、なんだかこそばゆい感情がこみ上
げ、紅潮する望は顔が熱くなるのを感じる。

（ど、どうしよう……足が痛いのは本当だからマッサージは嬉しいけど、ここで相
坂さんにしてもらうのは恥ずかしいよお）

長時間ブーツを履いていれば足が蒸れてしまうのも無理はない。しっとりとした靴下には足裏の起伏や指の形が浮かび上がってしまっており、どこか背徳的な雰
囲気が強くなっている。匂いも気になって戸惑っていると、脹脛を両手で包み込ま
れしなやかな筋肉を揉みほぐされていく。

「ンッ!? ふう……ん……ああ……」

適度な痛みの後にじんわりと広がる気持ち良さ。思わず声が漏れそうになってし
まった望は慌てて手で口を塞ぎ、一生懸命マッサージしてくれる護を見下ろす。椅
子に座る望の前で膝をつき、健気に尽くしてくれる姿は姫に忠誠を誓う騎士にも見
える。

だが、望にすれば嬉しさと恥ずかしさが混ざり合った拷問のようなものであり、
傍にいるスタッフに温かい目で見守られていることに気が付くと顔が真っ赤にな
っていく。

「はああ～～、うンッ……………あんツ……」

（相坂さん、マッサージ上手すぎるよ……気持ち良くて、変な声出ちゃうよお）

揉み解される脚部がポカポカと温かくなり、まるで温泉にでも浸かっているかの
ような心地良さが広がっていく。気持ち良さのあまり声を出したくなるが、ここで
口を開いてしまったらどんな恥ずかしい声が出てしまうことか。

恋人である護にそんな声は聞かれない乙女心がブレーキを駆けさせるが、く
ぐもった呻き声は聞く者によっては喘ぎ声に近くなり、余計に恥ずかしい姿を晒し
てしまっていた。

脹脛から手が離れたかと思うと、今度は膝から太股にかけて大胆に摩られる。女
の子の太股に触れるなど場合によっては痴漢行為にとられてもおかしくないが、護
に触れられる分には受け入れてしまう。それだけ望は護を信頼しているということ
だろう。

引き締まりつつも柔らかな太股が揉まれると、ピチピチに張った柔肌の弾力が伝
わり、細いながらも女性的な包容力を備えているのがわかる。疲れが溜まり凝り固

まっている部分を圧迫されると、望は頭を振って必死に声を抑え、忙しく肩を上下させていた。

（やっ、ああああ～～、そこダメえ!! 気持ち良すぎてゾクゾクするう～～、変な声が……恥ずかしい声が出ちゃうよおお～～）

「アンツ……はあ、はあ……ンンン～～～ッう！ アアアっ!？」

望の我慢は限界を迎え、桃色に染まる薄い唇が戦慄きながら開いていく。トロンと下がった目尻とピンクに染まった頬。蕩けきった美少女フェイスは事情を知らない者が見れば発情していると思われるもおかしくない。

マッサージがもはや愛撫と変わらなくなり、人気アイドルの口から普段のイメージとかけ離れた艶声が出そうになる。

「ひやあああ！ うう……き、気持ちい」

「避難警報発令！ 避難警報発令！ エンシェントビーストの出現が確認されました。付近の住民はただちに避難してください。繰り返します……」

その瞬間、望の喘ぎ声を掻き消すほどの大音量でサイレンが鳴り、避難を呼びかけるアナウンスが流れた。

緊急事態の訪れによってマッサージは中止され、ある意味でホッと胸を撫で下ろす望。しかし、安心してなどいられない。警報が示す事態は護のマッサージの恥ずかしさなどとは比べ物にならない脅威なのだから。

エンシェントビースト——それはかつて世界征服を目論んだ悪の科学者ドクターエンシーによって生み出された巨大生物の総称だ。

現代兵器すらまるで通じず、1度は世界を恐怖のどん底へと叩き落とした悪の化身。しかし、ドクターエンシーの野望は1人の巨大な女神によって打ち砕かれ平和は取り戻された——かに見えた。

一時は駆逐され尽くしたかと思えた巨大生物達。だが、最近の調査でエンシーが生前にエンシェントビーストの卵を残していたことが判明した。政府は総力を上げて卵の回収を行なっているが、全てを発見するには至っておらず、何かのきっかけで卵が孵化する事態が起きている。

今回ビーストが現れたのも、発見されていなかった卵が孵ったからだろう。こうなってしまうえば、巨大生物に無力な人間達は逃げるしかなく、ライブの熱気が未だ冷めやらぬ会場でも避難の準備が始まった。

「望ちゃん、早く避難を！ こっちだよ！」

「うん、わかった！」

担当アイドルを守るため、マネージャーである護は望の手を引きすぐに控室から飛び出す。通路に出れば撤収作業を中断したスタッフ達が慌ただしく駆けずりまわ

っており、球場の外から聞こえる怪物の雄叫びが建物を震わせて恐怖を煽ってくる。

球場の外にも帰宅途中の観客達は多く残っており、混乱からくる悲鳴があちらこちらから聞こえてきた。間の悪いことに、エンシェントビーストが現れたのは球場のすぐ近くだ。

併設されている建物は 20 メートルほどの高さだが、アスファルトを陥没させながら進むビーストはそれらの建物よりも更に大きい。歩くだけで地響きが起き、腕を振ればビルが粉々に砕け散る。

人々の前に姿を見せたのは真っ黒に塗り潰された西洋甲冑姿の巨人。全身が強固な鉄板で覆われており、素肌を一切覗かせない高い防御力を窺わせる。ヘルムの目元からは漆黒の霧がモクモクと吹き出し、その奥にルビーのように真っ赤な瞳がひとつだけ輝いているのが見えた。

「うわっ、なんか硬そうなのきたなあ。でも、重そうな分動きは遅いみたいだし、負ける気はしないかな！」

「わかっていると思うけど油断は禁物だよ。くれぐれも無理だけはしないでよね」
「もう、わかってるって！ 相坂さんは心配し過ぎい、アタシを誰だと思ってるの？」

人々にとって恐怖の対象でしかないビーストを目の当たりにしながらも、快活少女の口からは強気な言葉しか出てこない。球場のベンチ部分からビーストを観察していたのは控室を飛び出して逃げたはずの希望ヶ峰望と相坂護だった。

普通であれば建物の外に逃げるため、片付け途中のフィールド部分には誰も残っていない。そもそも、ビーストが現れたのに逃げないのが異常なのだ。これでは自ら死に向かっているようなもの。

しかし、望にとってはこれが最善。正体を隠して変身するためには目撃者のいない広い場所が必要なのだから。

「それじゃあ、行ってくるね相坂さん！ まだ打ち上げのお肉だって食べてないし、あんな奴さっさとやっつけてつきちゃうね！」

「うん、気を付けてね。僕もすぐにサポートに回るから、最高のステージを見せてくれ！」

「へへっ、と一ぜんでしょ！ 相坂さんもみんなもメロメロの虜にしちゃうんだから！」

護にむかって親指をグッと立てた望は屋根の無い球場のフィールドに出るとピッチャーマウンドに登る。アイドルによくある始球式に挑む——わけではなく、首から下げたペンダントを取り出した。碧色の宝石が埋め込まれた装身具を握りしめると強い意思を瞳に宿らせ、大きく深呼吸をする望。

祈りと共に碧玉にキスをすると、少女の純粋な想いに応え、クリスタルがまばゆい輝きを放つ。エネルギーの奔流を感じ取った望の体が虹色に輝き出したかと思うと、直後に光が爆ぜ、煌めく粒子が人型を成して絶望に包まれようとしていた地へ希望の女神を降臨させた。

「ライムホー———プ！ オンステ———ージ！」

そう、それは希望ヶ峰望が描くもうひとつのアイドルの姿。かつてドクターエンシーを討ち滅ぼし、世界を救った巨大ヒロイン、偶像女神ライムホープである。

「やった、ライムだ！ ライムホープがきてくれたぞ！」

「これでもう安心ね。ライム、あんな奴、早くやっつけちゃって！」

それまで恐怖に支配されていた人々の間に安堵の空気が流れる。世界を救った守護女神の存在はまさに平和の象徴。強さと美しさを兼ね備えたアイドル戦士の登場は女神が降臨したと思わせた。

適合者の想いを力に変え、神秘の力を発揮する宝玉ホープクリスタル。女神になる素質を持つ望はホープクリスタルの力を使い、人々を守るために凜然と胸を張る。

ホープクリスタルによる変身はベースとなっている人物の影響を受け、ライムホープは望の持つモデル並のプロポーションの良さを再現していた。生気に溢れるキュートな顔立ちと抜群のスタイルは観客を魅了し、ただそこに立っているだけでも神々しいオーラを放っている。

望の特徴のひとつである茶色のロングヘアーは銀色をした金属の輪によって後頭部の上側で一纏めにされ、活発なイメージを強くするポニーテールを作っていた。

華奢に見えて女性として出るべき所は出ている均整の取れたスタイルは全身を光沢感のある銀色の肌に包まれており、ピッチリと吸い付くボディスーツを着ているかのような色気を放っている。銀色の素肌にはライムグリーンの紋様が描かれており、更にその上にエナジーペイントと呼ばれるボディペイントがアイドルに衣装のように描かれていた。

首にはチョーカー、四肢には手袋にニーソックス。Cカップの美乳と小ぶりなヒップをカバーするのはチューブトップとスパッツといったところ。まるでこれからダンスを踊るような衣装は歌って踊れる望のスタイルを体現したかのようなデザインとなっている。

「みんなあああああ！ アタシが来たからにはもう安心だからね！」

ピースサインを描く右手を横にして目元に当て、片足を上げてウィンクを決めるライムホープ。やや腰を捻ることで自分の笑顔が1番可愛く見える角度を取る様はいかにも慣れている感じだ。

野球場のど真ん中で華やかな決めポーズを取ると、胸元と下腹部に位置するクリ

スタルが光輝き、迸るエネルギーの奔流がライムに力を与えていく。

客席を飛び越えるためジャンプしたライムは膝を抱えて身体を丸めると、体操選手ばりの軽快さを見せクルクルと回転して戦場へと降り立った。ライムなりの入場パフォーマンスを披露すると、アイドル女神は指を鳴らしてステージを構築する。「ホープステージ！ セットアップ！」

凜と響く声に合わせ、ライムホープとビーストを中心とした緑色のキューブが展開された。

ホープステージと呼ばれるこの緑色の結界は内と外との往来を遮断する特殊な壁である。同時に外部干渉を防ぐことによってフィールド内の建物や人をビーストから守る効果もあり、アイドルヒロインが心おきなく戦いに集中できる環境を作っていた。

「ほう、お前がライムホープか……くくく、会いたかったぞ」

「あら？ あなたアタシのファンなのかしら。でも、生憎ね、町を壊してみんなを苦しめるような奴はファンクラブに入れなから！」

「随分と生意気で気の強い小娘だな。安心しろ、俺はお前のファンなどにはならん。逆にお前が俺に服従を誓うのだからなあああ！」

舞台が整い役者が揃えば開幕のベルが鳴るのは必至。卵から生まれたエンシェントビーストは皆DNAレベルでライムを殺すようデザインされている。それも、ただ殺すだけではなく、より屈辱を味わわせ惨めな死を迎えさせようとする最悪の思考に染められているのだ。

知識としてもライムホープの基礎データがインプットされており、一筋縄ではない強敵となっている。

「だれがアンタなんかに服従するもんですか！ 寝言は寝てから言いなさいよね！」

自分が負ける可能性など微塵もないと確信している笑顔を浮かべ、ライムは軽快なステップで敵の攻撃を躲していく。甲冑を思わせる敵の拳はまさに鉄拳。華奢な少女がまともに受ければ顔を潰れてしまいそうな威力を持っている。

普通の少女ならば恐怖を抱かずにはいられない風切音が鼓膜を震わせ、紙一重で躲す柔肌をチリチリと痺れさせた。だが、ライムは怯むどころか闘志を漲らせ、踊るように立ち振る舞う。可憐な容姿と内に秘めた強い想い。その2つを併せ持つ偶像女神だからこそ生み出せる幻想的な光景は戦いを見守る人々を惹きつけていった。

「みんなライムを応援してください！ みんなの声が彼女に力を与えます。頑張れえええー、ライムホオオオオオプ！」



ホープステージの向こう側でひと際大きな声援を送り、ファンを扇動しようとしているのは相坂護だった。希望ヶ峰望のマネージャーとしてだけでなく、偶像女神のパートナーでもある青年はアイドルをバックアップするためにできる限りの努力を尽くす。

ホープクリスタルがエネルギーへと変換するのは、ステージに立つ使用者の思い。そして彼女に向けられる人々の願いだ。

現実のアイドルが1人では活動できないように、ライムホープにもまた、女神を崇拝してくれるファンの存在が不可欠である。

人々が「ライムに勝って欲しい」「負けないでくれ」と強く願えば、想いは偶像の女神を後押しする力となる。

しかし、逆に「ライムなど負けてしまえ」「辱められる姿が見たい」と邪な願いをもたれてしまうと、欲望もまたクリスタルに反映されてしまうのだ。

過去にドクターエンシーとの戦いでライムのエネルギーを司る2大要素は暴かれてしまっており、人々はライムの弱点を知ってしまっている。だからこそ、護は人々の願いが悪い方向へと向かないように声を出し、ライムに対して歪んだ願望を抱かないようにフォローしていた。

望のライブが終わったばかりということもあり、幸いにもファンの数は十分。ホープステージという絶対的な守護障壁に守られている安心感もあり、ライムホープは希望のエネルギーで満たされていた。

(予想通り、パワーはありそうだけど動きは遅いわね。よーし、反撃よ！)

大振りのパンチを鮮やかに捌いたライムは流れるような動きで敵の懐に潜り込むと、力強いかけ声と共に拳を放った。渾身の一撃は敵の頭部を的確に捉え、少女の華奢な身体からは想像もできないパンチ力に面食らって後退する。

声援に後押しされ追撃を仕掛けるアイドル女神はジャブ2発で距離を測ると、腰の捻りを活かしたストレートパンチを叩きこみ、ビーストをのけ反らせていく。

ライムの優勢が顕著になればファンは沸き、エネルギーが補充されてライムの猛攻は激しさを増す。

(なに、この感覚……攻撃は当たっているはずなのに、手応えがおかしい。空の鎧を叩いているみたいだわ)

のけ反り、フラついているものの、ビーストは要所で踏ん張りを効かせ倒れない。長い脚を活かしたハイキックが敵を打ち抜くも、グラグラと揺れるだけでダウンには至らず、反撃のフックをもらいそうになって冷汗が浮かんだ。

なびくポニーテールをビーストの拳が掠めると、美しい茶髪がブワッと広がる。すぐさま反撃に出るも、ボディ打ちは金属を叩く反響音を発し、鼻屑目に見ても効

いている様子がなかった。

「へ、へえー、なによ、アンタ。結構タフじゃない！ でも、そのやせ我慢がいつまで続くかしら？」

自分の優勢を信じる笑顔を浮かべ、ファンを安心させようとするライム。しかし、その笑顔の裏側では隠したい焦りが顔を覗かせ始め、動きにムラを生み始めていた。

ライムホープの造形がベースとなる望の影響を受けているように、偶像女神の調子は望のコンディションに大きく左右されてしまう。

控室で休憩を取ったとはいえ、直前まで望は2時間にもおよぶライブをやっていたのだ。ステージ上では笑顔を絶やさず疲れなど欠片も感じさせないが、それだけの時間歌って踊れば疲労が溜まらないはずがない。

単独ライブとなれば負担は特に大きく、言葉にはしないがスタミナ面で不安を抱えていた。一般人が想像する以上にハードなライブは前後で体重が減るなどよく聞く話。実際、望もライブ直後には体重が3～4キロ減ることも珍しくなかった。

細身の望にとってそれだけの体重減は文字通り身を削る行為。ビーストに対して攻撃は当たっているものの、呼吸が乱れてきており、丸みを帯びた細い肩が上下しているのが遠目に見てもわかる。

汗をかきやすい体質はライムの肉体にも反映され、光沢のある銀色の肌が湿り気を帯びてしっとり光輝く。健康的な美肌に付与される艶やかさは見る者に少女特有の色香を感じさせ、やや苦し気な息づかいが背徳的な雰囲気を感じさせてしまった。

ライブの直後でなければ、スタミナの心配をする必要などなかったはずなのに。戦う場所も時間も敵に掌握されてしまっているのは正義の味方の辛いところであろう。

「どうしたライム、だんだん動きにキレがなくなってきたぞ。ほら、隙ありだ！」

「しまっ、くっうう!？」

焦りから不用意に打ったパンチを防がれてしまうと、返しの一撃がライムの脇腹を捉える。咄嗟に自分から飛び退き威力を殺したものの、全ての衝撃を逃がしきることはできず、美少女フェイスがこの戦いで初めて苦痛に歪んだ。

ライムの持つ銀色の肌はゴムのような弾性に富んでおり、斬撃や打撃に対して高い耐性を持っている。とはいえ、全身甲冑の拳は鉄の塊で殴打されたに等しい衝撃を生み、ダメージを完全なゼロにできるわけではない。

痛恨の一撃を受けてしまい、体勢を立て直したい偶像女神は1度間合いを取り直そうとした。だが、後方へ跳ぼうとした瞬間、力を込めた右足に釘を打ち込まれたかと思うほどの激痛が走り動きを鈍らせる。

(うっくう、そんな!? こんな、時に、あああっ!!)

控室で足を摩っていたことを「疲れが溜まっている」と説明した望。しかし、その実はライブの途中で痛めてしまった膝を気にしての行動だった。

恋人である護に心配をかけたくなくてウソをついたが、本当ならばテーピングを巻いておきたいくらいに痛んでいる。それがこの土壇場で無視できないものになってしまうとはなんとという不運。

騎士甲冑をイメージさせる敵の掌に黒い霧が渦巻いたかと思うと、鎧と同色の真っ黒なスピアが生み出される。足の痛み顔に顔を歪めながらも、ライムは更に後方へ跳んで懸命に攻撃を躲そうとした。だが、拳ならばまだしも、武装されてしまっちはリーチが段違いだ。

敵の間合いから逃れきれず、着地の瞬間を狙われた横薙ぎの追撃が女神の美脚を捉える。よりもよって、痛めている右膝が伸びきったタイミングで攻撃を受けてしまい、目を見開くほどの激痛に襲われたライムは悲鳴を上げて崩れ落ちてしまう。

痛みが燃えるような熱さに変わり、関節が悲鳴を上げてしまっていた。立ち上がろうとしても膝の痛みで足を引きずってしまう形となり、庇うように添えた指先が辛そうに震えている。パワーで劣るライムにとって機動力は戦闘の生命線。しかし、この膝ではもう踊るような華麗なステップはできそうにもない。

フットワークという名の翼を奪り取られてしまった天使は高層ビルに背中を預ける格好でどうにか立ち上がる。闘争心は未だ萎えていない。苦しいがまだ戦おうとしている。

「くくくっ、脆いな小娘。さっきまでの威勢の良さが感じられないぞ！」

「うっ、くう……あっ、そ、そこは!? きゃあああああああああ！」

痛めてしまった右足を生まれたての子馬のように震わせるライムは敵から見れば格好のマトであった。ビルを背にしてしまったせいで後ろに逃げることもできず、スピアによって下腹部のクリスタルを突き上げられてしまった。

ライムホープの下腹部に位置する宝石はサンクチュアリジュエルと呼ばれ、乙女の性器を具現化したものだ。ツルツルの銀肌に覆われた偶像女神の股間は秘裂や陰核が見えない一方で、サンクチュアリジュエルが性感帯の役割を果たしている。女神としての偶像性を向上させるため、子宮を象ったシンボルはライムが感じてしまう弱点。性的な責めに脆い少女戦士にとっては責められたくない場所のひとつだった。

「こんな宝石を弄られて本当に感じるとはな。ふふっ、だんだんといやらしい顔になってきているのではないか。アイドルなどよりも、お前にはAV女優の方が似合っているのではないか」

「ふ、ふざけたことを言わないで！　こんなの、ンンッ、全然、か、感じてなんて、ふあああああ!!　ない、だからあ、ああああンンン！」

強気に反論するものの、抑えられない声は甘く響き、モジモジと擦り合わせる太股の奥では股間から滲み出る愛液が素肌の擦れに合わせて、クチュクチュと卑猥な音を立ててしまう。スピアの先を回転させられると、膣中を抉られるに等しい淫感が生まれてしまい、膝の頭が戦慄いて崩れ落ちそうになっていた。

紅潮する頬と汗で湿る銀肌が妖艶に輝き、勝気な女神のイメージをアダルティックなものに変えていく。気持ちだけではどうしようもない身体の反応は女としての一面を強くし、ファンに見られていると思うと余計に意識してしまう。

(だ、ダメええ、サンクチュアリジュエルをそんなに突かれたら……か、感じちゃうよお……みんなに恥ずかしい顔、見られちゃう)

注目を集めやすい巨大な身体は人々の声援を力に変えるライムにとって、自身をアピールできる長所だ。だが、その反面隠しておきたい屈辱的な一面も晒してしまうことになり、長所はそのまま短所にもなる諸刃の剣である。

緑色に輝いてはずのジュエルはスピアによる愛撫を受けるにつれてほんのりと桃色に変色していた。サンクチュアリジュエルの桃色はライムが発情してしまっている証。口ではどれほど取り繕っていても、ジュエルの反応だけは制御しきれず、人々にも感じていることがバレてしまっていた。

「サンクチュアリジュエルが赤くなって、ライム、感じちゃってるんだな。見ちゃいけないとわかってるけど、やっぱエロいなあ」

「みんなが応援してれば、俺ひとりがエッチな気持ちになっても大丈夫だよな。ライムのスケベな声堪らね～～」

ライム相手に淫らな感情を抱いてしまえば、ホープクリスタルに影響が出てしまうことはファンもわかっている。自分達の身を守る意味でも、いかがわしい目でアイドル女神を見てはいけないことくらい理解していた。

だが、女神と呼ばれることに何の違和感も抱かせないほど美しい少女が艶やかな姿を晒せば、人の本能は性欲に従順な反応を見せてしまう。

喘ぎ悶えるライムがだらしなく涎をこぼすと、年頃の少女とは思えない色香が増し、望まぬ感情が流れ込んでくる。邪な想いによってホープクリスタルの輝きが鈍ると、胸部をカバーしていたエナジーペイントが薄くなってしまい、ライムは弱体化を迫られた。

エナジーペイントは偶像女神の身体能力をブーストするものであり、薄くなればその分ブースト機能も低下してしまう。その上、透けるという現象がアイドルのコスチュームを象っているがゆえにエロスを強め、ライムをより淫靡な姿へと変えて

しまうのだ。

「エネルギーペイントが薄くなって、恥ずかしい場所が透けてきたな。今ならば胸のクリスタルの位置も丸わかりだな」

Cカップバストの頂点にはアンコールジュエルと呼ばれる宝石が2つ備えられている。本来の用途はライムのエネルギー切れを防ぐための予備エネルギー貯蔵庫だが、女性である望の影響を受けることで乳首的な性感帯にもなってしまうていた。

薄くなったエネルギーペイント越しに見えるアンコールジュエルは濡れた衣服越しに透け見える乳頭の様相を見せる。新たにスピアを生み出したビーストはお椀型の美乳をいやらしくなぞると、擬似乳首を乳房へと押し込むようにグリグリと突き始めた。

「ちょ、ちょっと、どこ触ってるのよ！ やめなさい！ こんなことして、絶対に許さ、ふああああああつ！ はへええ、や、やめろって、言って、ああっひいいいい！」

気丈な言葉も突きひとつで喘ぎ声に変えられると滑稽さが際立ってしまう。乳首と子宮の2つを同時に責められているに等しい女体は昂ぶりに耐え切れずビクビクと震え、愛液を滴らせて悶えることしかできない。

スピアを退かすため掴んでみても、激しく揺されると指先から力が抜けてしまい、無力さをアピールさせられてしまう偶像女神。くびれた細腰をくねらせ、ポニーテールを揺すって悶える様はライムをいやらしい目で見ると呼び水になってしまい、ホープクリスタルの力がドンドン低下してしまう。

「ほうほう、大ききこそ平均的ですが、中々突き心地の良いおっぱいだ。なによりも感度がいい！ 少し弄ってやっただけでビクビクと肩を震わせる姿が堪らないな！」

「ふっくううう！ そんな、褒められ方したって、あううん、全然、嬉しくないわよ……はあ、はあ、アンツ！ え、エッチなとこばっか狙って、この卑怯者おお～」

反抗的な態度こそ取るが、細く整えられた眉はハの字を描き、アイドルフェイスが蕩けているのは隠せない。気力で堪える姿はライムがまだ諦めていないことの証拠であり、この粘り強さが今までも幾度となく劣勢をひっくり返してきた原動力だった。

「淫乱娘が戯言を！ ならば、これはどうだ！」

アンコールジュエルからスピアが離れ、一瞬安堵するライム。しかし、次の瞬間にはより激しく美貌を引き攣らせることになる。

カギイイイイイインンン！

を押さえて身体を跳ねまわせる始末。

痛みがいつまでも消えてくれず横に寝ていたかと思えば、足を折りたたんでバタバタともがき喘ぎ続ける。とにかくジツとしていられず、ゴロンとうつ伏せの体勢に寝転ぶとファンの視線がツンと上向いたまるやかなヒップに集まってしまい、腰を振るたびに欲情を誘うように揺れてしまう。

「なんだ、そんなの尻を振って！ もっと責めて欲しいのか、このマゾアイドルが！」

ズブウウウウウ！

「うぎゃあああああああ！ やめてええええ、アソコ、もう突かないでえええー！」

無防備過ぎる股間をもう1度スピアで突かれ、再び横になって身悶えるライム。引かれたスピアの先には粘つく愛液が付着しており、偶像女神の陰部が濡れていることを示す証となる。

ビーストはライムを蹴り転がし仰向けに寝かせると、両腕を踏みつけ、細い肘が軋むほどの勢いでグリグリと潰していく。全身甲冑のビーストは鈍重な見た目通り非常に重く、体重をかけられてしまうと、アイドルの細腕では対抗できない。

弱点であるホーククリスタルが無防備になり、ヘルムから覗き見える真っ赤な瞳がいやしく歪む。いくら勝気な望でも恐怖を隠しきれず動揺を滲ませると、2本のスピアが黒い霧に戻って混ざり合い、1本の大槌となって再構築された。

ホーククリスタルを砕こうとしているのは明らかであり、先端は平面ではなく円錐状に尖っていて、破壊力も段違いであることを見せつけている。

「くっ、ううう、は、放せ！ うううううう～～」

足をバタつかせ身体を振ったところで重量差は覆せず、逆に肘を踏む足に体重をかけられてしまい悲鳴を上げさせられてしまう。

「無駄だ、無駄だ！ もう、お前は逃げられない！ ホーククリスタルを粉々に砕いてくれるわー！」

容赦なく振り降ろされた鉄槌がライムグリーンに輝く結晶体に迫る。勝ちを確信したビーストは瞳を三日月型に歪め、気の弱い観客はライムの悲惨な姿を見ることに耐えられなくて目を逸らしてしまった。

敗色濃厚。絶体絶命。

偶像女神の力の源が完全に破壊されようとしている。

「いいえ、まだよ！ ホープ・フォグ！」

しかし、追い込まれてなお不敵に笑ってみせたアイドル戦士は諦めを知らない美声を響かせる。まさに大槌がホーククリスタルを砕こうとした刹那、ライムを包む

ように白煙が噴き出したと思うと、身動きを封じられていたスレンダーボディは姿を消し、ビーストの一撃は床を叩いて終わった。

突然消えたライムを探し、ビーストがキョロキョロと頭を振ると、後方より白煙が噴き出し、その中からライムが姿を現す。

ホープステージは観客を守る壁の役割以外に、アイドルの演出を補助するステージギミックの効果も持っているのだ。

先程のホープ・フォグは煙を使ってステージ内を瞬間移動できる技であり、偶像女神のステージを彩る代表的なイリュージョンのひとつである。

「チッ、くだらん小細工を……だが、もはやその足ではまともに動けまい。煙の出現位置にさえ気を付ければ追撃するのも容易い。残念だったな、もう同じ手はくわんぞ！」

確かにビーストの言う通り、痛めていた膝が悪化してしまったライムはスピードを奪われてしまっている。ホープ・フォグにしても移動先がバレやすい弱点を看破されており、次に組み敷かれれば今度こそ終わりだろう。

悔しいがスタミナもだいぶ削られてしまいほとんど残っていない。だが、それでも勝気な瞳の闘志は消えず、かかってこいと挑発的な笑みをこぼしていた。

大槌を携え突進してくるビーストが生意気な小娘を叩きつぶそうと自慢の武器を振りかぶる。その華奢な身体で受け切れるものなら受けてみろ。そんな言葉が聞こえてきそうな気迫と共に鉄槌が振り降ろされた。

「甘いわよ！ ホープ・ワイヤー！」

ライムの声に応え天井から緑色に輝くワイヤーを伸びて繋がったかと思うと、女神の身体は吊り上げられて宙に浮き、ビーストの攻撃を軽やかに躲してみせる。

これもライムが主力として使うステージギミックのひとつ。ステージ内を縦横無尽に走るワイヤーを使うことにより、多様なワイヤーアクションを可能にする移動補助ギミックだ。

威力はあっても鈍重なビーストの攻撃に対し、手負いの偶像女神はワイヤーを巧みに使い神懸った回避を成功させる。宙を舞う際に流れ落ちる汗がキラキラと光ると、妖精がダンスを踊るかのような幻想的な雰囲気を作り、見惚れる観客達の視線がホープクリスタルにエネルギーを送っていく。

「ふん、ちょこまかと動いて小賢しい。いくら避けるのが上手かろうか、貴様のパワーでは俺は倒せんことがまだわからんのか！」

「私のパワーじゃお前を倒せないですって？ それはどうかしら、ホープ・ライト！ タイプイエロー！」

ライムが指を鳴らすと、ステージの天井に出現した巨大なライトから黄色い光が

降り注いだ。ホープライトからのエネルギーを受けると、銀肌に描かれていたライムグリーンの紋様はイエローへと変化し、握り締めた拳に力が漲っていく。

「くらええええ！ たあああああああ！」

ワイヤーを使って振り子のように揺れるライムが流星のごとき勢いでビーストへと急接近する。上空からの落下エネルギーを加えた一撃が分厚い鉄の胸板に叩きこまれると、アイドル戦士の倍以上の重量を持つはずの巨体が殴り飛ばされた。装甲は拳の形に陥没し、もはや非力などとは呼べない迫撃の豪腕と化している。

これこそがホープライトの力。当てられるライトの色によって、ライムの身体能力を一定時間ブーストするギミックだ。

黄色はライムホープのパワーを向上させ、通用しないと思っていたパンチを鉄板をも突き破る威力に引き上げている。

ワイヤーの接続と切り離しを繰り返し、もはや空を飛んでいると変わらない動きでビーストにラッシュをかけるライムホープ。肩のアーマーが弾け飛び、ヘルムがボッコリと歪む。脚部を破壊されると自重を支えきれずにビーストは遂に膝を付く。敵のダウンに合わせて観客から歓声が上がると、ライムはファンにウィンクし、ライブ会場さながらにボルテージを上げていった。

「あ、ありえん、この俺がお前のような小娘に押されているだと……認めん！ 認めんぞおおおお！」

ビーストは大槌を黒い霧に戻すと、巨大な弓矢へと変化させてライムに狙いを定める。引き絞られた弦がキリキリと軋む音は緊張感を生み、アイドル戦士を狙う必殺の一撃を警戒させた。

「躲せるものなら躲してみろ！ この俺の矢を！」

矢が放たれたと思った瞬間、一陣の風がライムの頭上を通過していた。通り過ぎた矢の起こす突風によってポニーテールが後ろへなびいたかと思うと、アイドル女神の身体が地面へと落下してしまう。

あまりに一瞬のことに対応が追い付かないライムはステージの床へと叩きつけられると、矢が外れたのではないことを理解した。

（まさか、今の攻撃はアタシじゃなくてワイヤーを狙ったていうの!?)

足の怪我で素早く動けないライムはワイヤーを使って再度上空へ逃げようとするが、ワイヤーが接続されそうになると矢が邪魔をして身体を吊り上げられない。偶然ではない。ビーストは指よりも細い糸を狙って撃ち落としているのだ。

（なんて精度なの!？ まずいわ、このまま動きを止めていたら、狙い撃ちされちゃう）

パワーばかりだと思っていたビーストがまさかこんなにも緻密な攻撃をしてく

るとは。予想外の強襲に対応しようとするライムであったが、敵は既に動きを読んでいた。

5本もの矢を同時につがえたかと思えば、ライムの逃げ場を完全に塞ぐようにして射線をとる。一斉に放たれた矢が螺旋状に回転し、偶像女神の肢体を貫こうと迫っていった。

それに対し、ライムは両腕を胸の前でクロスする。せめてホープクリスタルだけは守ろうという防御姿勢なのか。これでは例えクリスタルは守れてもダメージは甚大だ。二の矢でトドメをさされてしまうだろう。

「そんなことで防ぎ切れるものか！ 終わりだ、ライムホープ！」

ビーストが勝利を確信する中、ライムもまた勝機は自分にあると思っていた。交差した両腕は防御を固めたわけではない。握り込んだ拳にエネルギーを凝縮させると、希望の女神は両腕を突き出し、必殺技の名を高らかに叫んだ。

「いえ、勝つのはアタシよ！ いっけええええ、セイグリッド・シューティングスター———!!」

幾多のビーストを殲滅した虹色の光線が二条の螺旋を描いて全てを飲み込んでいく。放たれた5本の矢全てを消滅させたセイグリッド・シューティングスターはそのままビーストのボディを貫き、鋼鉄の鎧をただの鉄塊へと変えた。

「なんだ、この威力はああああ！ ば、ば、バカなあああああ！」

断末魔の叫びを発したビーストは崩れ落ち、光の粒子となって消滅していく。地面にゴロンと転がったヘルムの奥に灯っていた瞳の光が消えた。

鮮やかな逆転勝利を決めたアイドル戦士は登場した時と同じポーズをとって舞台のラストを飾り、ファンに向けてにこやかに手を振る。

「みんなあああ！ 今日応援ありがとう！ みんなのおかげでアタシは勝てたよ、これからもライムホープをよろしくねええええ！」

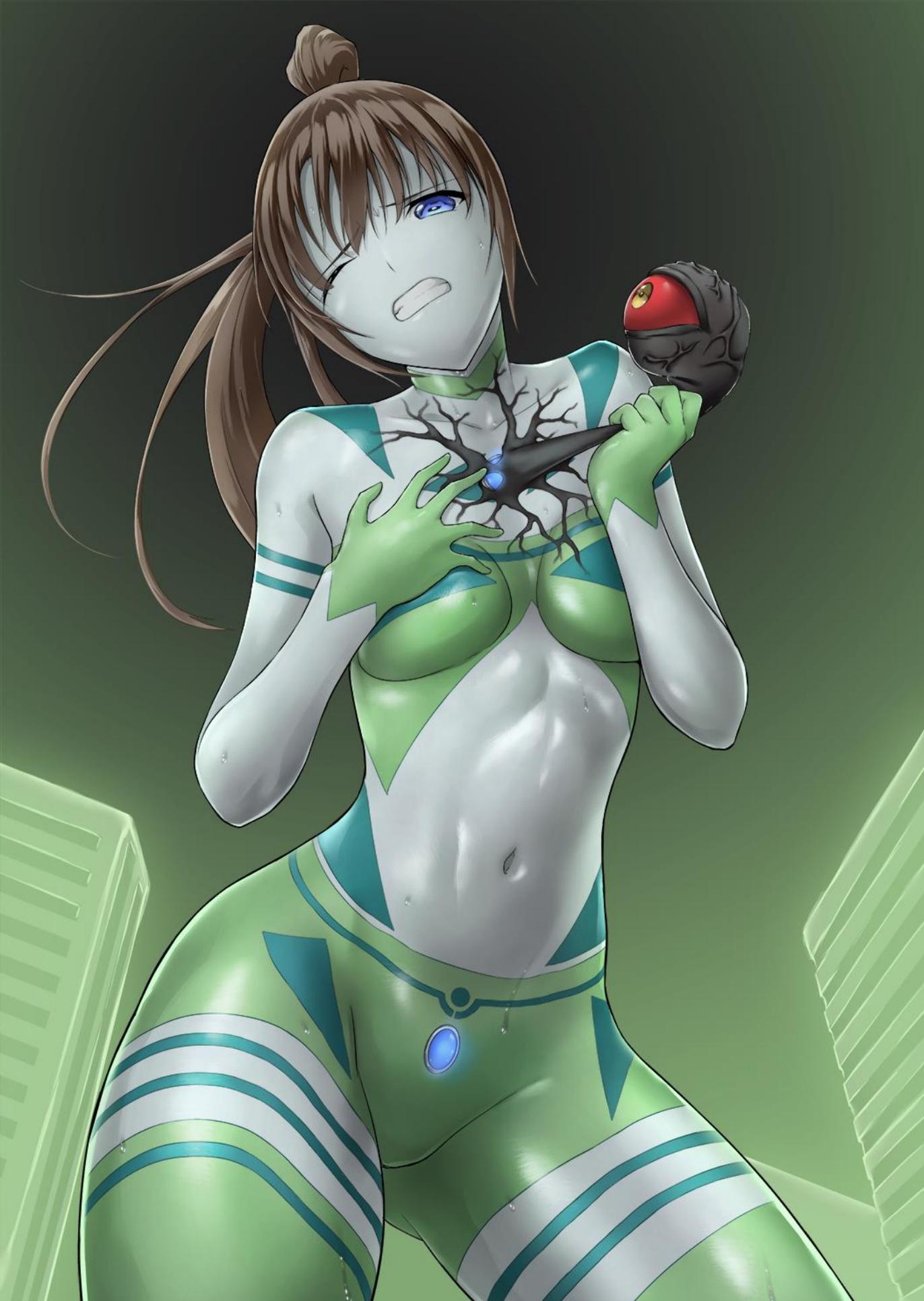
希望の女神の勝利宣言を聞き、湧き上がる観客達から勝どきの声上がる。危ないところだったが、今日も人々を守ることができた。

内心ホッとしたライムは最前列で応援してくれていた護と目が合うと少しだけ表情を緩ませる。人類の守護女神ではなく、ひとりの女の子として恋人だけに見せるその笑顔はいつもよりもいっそう輝いて見えただろう。

（へへっ、相坂さんもありがとうね。よーし、ビーストも倒したし、この後は打ち上げよ！）

ビーストは光の粒子となって消滅していき、全ては終わった。あとはホープステージを解除して正体がバレないように元の姿に戻るだけだ。

完全な撤収モードに入ったアイドル。それを油断というのはあまり酷だろう。



しかし、未知の敵との戦いはまだ終わってはいなかった。セイグリッド・シューティングスターで粉々になった鎧が消え、最後に残ったヘルムが完全に消滅する刹那、内部から黒い何かが飛び出し、護に気を取られていたライムの胸元へとへばりついたのだ。

「えっ、なに!? あっ、きゃああああああああああああ！」

よりもよって、力の源であるホープクリスタルへ接触されてしまったライムは胸元を押さえ、苦し気な叫び声を上げて身体を震わす。

「へへへへっ、守護女神などと呼ばれていても所詮は小娘だな！ あの鎧を俺の本体だと思ったんだろ？ 残念だったな、この俺、パラサイトビースト様にとって、あんなものは使い捨てのボディにすぎないんだぜ」

寄生生物を意味する名の通り、パラサイトビーストの真の能力は取り付いたものの身体を意のままに操るものだ。

ホープクリスタルを覆い尽くしたアメーバ状の生物は真っ赤な単眼をギョロリと見開き、不気味に蠢きながら広がった黒い体表が銀色の肌を侵食していく。植物が根を張るがごとく筋が浮かび、細い首の半ばから鎖骨の辺りまでをライムホープは侵されてしまった。

「くっ、この！ 離れなさいよ！」

パラサイトビーストを引き剥がすため、目玉の部分をつ掴み両腕に力を込めるライム。ホープライトの効果により、パワーモードになっている今ならばビーストにも力負けしない金剛力で剥ぎ取ることも可能だろう。

しかし、それを易々とさせてくれるほどパラサイトも甘くはない。

「チッ！ これが女神の力か、身体を全部乗っ取ることはできないようだな……だが、ホープクリスタルに干渉できれば、お前も苦しめることは簡単だよなあ。ほーら、こんな具合によおお！」

「ふん、アンタなんかにアタシの身体を好き勝手させるわけないでしょ！ アイドルにお触りなんて、ご法度なんだか、ううう!! えっ、な、なに!? 力が抜けてく、ホープライトの効果が、消えてく!?!」

ホープライトは元々時制限りの能力であり、一定時間経つと自動で解除される仕組みになっている。とはいえ、いくらなんでも効果切れには早過ぎる。ライムが戸惑っている間にも、身体の模様はパワーの黄色から通常の緑に戻ってしまい、パラサイトを引き剥がすことができなくなってしまった。

(なんでライトの効果がこんなに早く……あっ、ま、まさか!!)

ライムの予想は当たってしまっていた。ホープクリスタルに寄生されてしまったことにより、アイドル女神はホープステージのコントロール権を奪われてしまった

のだ。

ライムグリーンだったキューブは赤く変色し、これから守護女神を血祭りにあげると言わんばかりの禍々しい雰囲気にも包まれる。

右膝の怪我。残り少ない体力。それらをカバーするために必要なギミックが一切使えなくなってしまい、笑顔をやささないはずのアイドルは焦りの表情を貼り付けてしまっていた。

アイドルはひとりの力では輝けない。少女を彩ってくれるステージがなければ、どんなパフォーマンスも本来の魅力を出せないだろう。

偶像女神にとって、絶望的なステージの幕が上がる。これから行われるのはライムホープを地獄へと誘う破壊のステージだった。

※体験版は以上になります。

続きは製品版にてお楽しみください。